

# AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises  
日本ケベック学会ニュースレター

2016年 秋号

第7巻第3号(通算20号)

2016年11月30日発行

## 2016年度 全国大会特集

### 第8回全国大会を終えて

小倉 和子(立教大学)

去る10月8日(土)、明治大学駿河台キャンパスにて、日本ケベック学会の全国大会が行われました。今回の大会は、2008年にこの明治大学で設立大会が開催されて以来、8回目にあたり、10月8日の開催、学会誌も第8号が刊行されたばかりと、8づくしの大会でした。「八」は漢字で書けば末広がり、算用数字を横に寝かせれば「∞」となり、無限大を意味します。そのような大会を故小畑精和前会長の本務校であった明治大学で開催できたことは、AJEQの今後の発展にとっても意義深いものでした。開催校代表として会場の確保や整備にご尽力くださり、開会式では心のこもったご挨拶を賜りました萩原芳子会員はじめスタッフの方々に心よりお礼申し上げます。

プログラムは大きく分けて「自由論題」、「基調講演」、「シンポジウム」から構成さ

れ、いずれも内容の濃いものでした。その詳細については各担当者からの以下の報告をご覧くださいと思いますが、とりわけ、多忙な中ケベックからお越しくくださった作家のキム・チュイさんには感謝申し上げます。キム・チュイさんは10歳のときにベトナムからボートピープルとしてケベックに受け入れられた方です。現在ケベックで引っ張りだこの人気作家で、大会の基調講演だけでなく、その後行われた一連の講演でも、お人柄あふれる話しぶりで学生や一般聴衆を魅了しました。



小倉和子前会長(写真は2015年10月)

### ●本号の内容●

巻頭言(小倉和子)…1      2016年度全国大会・各セッション報告…3

ブランサブロン紀行(大石太郎)…8      (リレー連載「ケベックと私」はお休みします)

また、学会設立当初より交流を重ねてきた韓国ケベック学会からも、今回はハン・ヨンテク会長みずから参加して、「空飛ぶカヌー chasse-galerie」にまつわる口承文学を語りの技法の観点から分析してくださいました。AJEQ ではこれまで扱われたことのない新鮮なテーマで、交流の意義を実感しました。

大会の最後に行われた総会では、立花英裕新会長の就任が報告されました。わたし自身は小畑前会長の後を承けて2期4年間会長職を務めさせていただきましたが、この間、学会の活動を支えてくださった役員や会員のみなさん、そしてケベック州政府在日事務所や国際ケベック学会に厚くお礼申し上げます。他学会とも連携しつつ、ケベック研究の裾野を広げていくことを第一に考えてきましたが、試行錯誤があったことも否めません。今後は立花会長のもとで、さらに研究の進展・深化を図っていくお手伝いをさせていただきます。

AJEQ の活動は海外からも注目されています。会員のみなさんの益々のご活躍をお祈りいたします。

(日本ケベック学会顧問・前会長)

### <日本ケベック学会第5期役員紹介>

去る10月8日に開催された日本ケベック学会総会において、第5期役員が承認されました。

- |     |                               |
|-----|-------------------------------|
| 会長  | 立花 英裕 (早稲田大学)                 |
| 副会長 | 伊達 聖伸 (上智大学)                  |
|     | 丹羽 卓 (金城学院大学)                 |
|     | 矢頭 典枝 (神田外語大学)                |
| 顧問  | ドゥロンジエ, クレール (ケベック州政府在日事務所代表) |
|     | 小倉 和子 (立教大学)                  |
| 監事  | 加藤 普 (理化電子株式会社)               |
|     | 曾田 修司 (跡見学園女子大学)              |
| 理事  | 飯笹 佐代子 (青山学院大学)               |
|     | 大石 太郎 (関西学院大学)                |
|     | 片山 幹生 (早稲田大学)                 |
|     | 古地 順一郎 (北海道教育大学)              |
|     | コルベイユ, スティーヴ (聖心女子大学)         |
|     | 真田 桂子 (阪南大学)                  |
|     | 杉原 賢彦 (立教大学)                  |
|     | 関 未玲 (愛知大学)                   |
|     | 橘木 芳徳 (甲南大学)                  |
|     | 西川 葉澄 (上智大学)                  |
|     | 廣松 勲 (法政大学)                   |



2016年度全国大会参加者の集合写真

## <各セッション報告>

2016年度全国大会は、萩原芳子会員（明治大学）による開催校代表挨拶に続き、ケベック州在日事務所のマルク・ベリヴォー氏のご挨拶をいただいたのち、自由論題セッション、基調講演、シンポジウムの順に行われ、活発な議論が繰り広げられました。以下は、それぞれの司会者からの報告です。



佐々木菜緒会員

## 自由論題セッション

司会：廣松 勲（法政大学）

今年度の自由論題セッションでは、ケベック文学に関する3つの発表が行われた。いずれの発表も作者論や作品論に留まらない、より広い視点から論じた力作であった。

1つ目の発表は、佐々木菜緒会員（明治大学大学院）による「アンヌ・エベール『魔宴の子たち』における補記の戯画的作用」であった。まずはアンヌ・エベール（1916～2000）にとって3作目に当たる *Les enfants du sabbat* の歴史的・社会的な背景が解説された上で、作品内に多用される「挿入句」が有する戯画的作用について論じられた。方法論としても、ケベック州において主流といえるような「社会批評 sociocritique」を用いており、非常に興味深い内容であった。特に、「挿入句」の戯画的作用について、所謂「お笑い」における「つつこみ」を見てとった視点は、より明確な内在的根拠付けが必要であるものの、今後の拡がり期待できる論点であるように思われた。

2つ目の発表は、立花英裕会員（早稲田大

学）による「ガストン・ミロンとローランティド」であった。本発表では、まずガストン・ミロン（1928～1996）の伝記的要素について解説がなされ、同時に彼の代表的な詩作品である *L'homme rapaillé* の特異な推敲過程について説明がなされた。その上で、ミロンが描き出す言語的困難の意識が、どのようにして「具体的な地理」から「想像界の地理」へと変容したのかについて論じられた。特に、そのような想像界の変容に伴って、その重要性が高まる「ローランティド」（ケベック州の実在する地方行政区の1



立花英裕会員

つ)に関する「地理詩学 géopoétique」が素描された。このような地理的側面と詩的想像力の接続を介して、ナショナルな共同体を導き出そうとする立場として、国木田独歩によって描かれた「武蔵野」という場所との共通性についても言及されるなど、比較文学研究としても興味深い発表であった。

最後に3つ目の発表は、韓国ケベック学会から参加して頂いたハン・ヨンテク会長(京畿大 学校)による *L'historicité et le surnaturel dans la littérature québécoise du 19<sup>e</sup> siècle : autour des contes fantastiques de Honoré Beaugrand* であった。これまで日本のケベック文学研究において、殆ど研究蓄積の無いオノレ・ボグラン(1849~1906)を中心的な研究対象としながら、19世紀のケベック州における「文学野」について解説がなされた。その上で、19世紀ケベック文学において「民話 contes」の果たしていた役割について検討しつつ、具体的にはボグランの *La chasse-galerie: légendes canadiennes* における「幻想物語 contes fantastiques」の物語構造について分析がなされた。まずは、そのような物語における二重構造(入れ子構造)が明らかにされると同時に、それぞれのレベルを統括する2種類の「語り手」の位置づけが確認された。このような分析作業を介して、ケベック文学研究では低い評価のされがちな19世紀の幻想物語の役割を再評価することを目指した発表であったといえる。

以上のように、今年度の自由論題セッション



ハン・ヨンテク氏(左)と司会の廣松勲会員

ョンにおいては、19世紀から20世紀におけるケベック文学の「古典」が分析の俎上に挙げられた発表であった。端的に言うならば「フランス語圏文学研究」の魅力は、一方には各地域における最新の文学作品を読み解く研究に一つの極があるとするならば、もう一方にはそのような研究の土台ともなる、各地域の所謂「古典≒カノン」となった文学作品を読み解く研究が存在することにあると考えられる。これまでの日本ケベック学会では、どちらかといえば前者のような研究に視線が向かってきた中で、今年度はより堅実でありながらも、同時にできるだけ新しい観点から古典を読み解こうとする刺激的な発表が行われたといえる。今後とも古今問わずに、上記で例示したような双方向の視点から、アジアにおけるケベック文学研究が発展していくことを望んでやまない。

\*\*\*\*\*





## 基調講演

### キム・チュイ (作家)「ベトナムとケベックのあいだで書くこと」

司会：関 未玲 (愛知大学)

今大会の基調講演には、国際ケベック学会の助成により来日されたベトナム系作家キム・チュイ氏を招聘し、ご講演をお願いした。翻訳家、通訳家、弁護士、レストラン経営など多くの職業を経て、2009年に初の作品となる *Ru* (邦題『小川』は、2012年に山出裕子会員の翻訳で彩流社から出版されている) で鮮烈なデビューを果たしたチュイ氏は、その後2011年に *À toi*、2013年に *Mãn* (パルカル・ジャノヴジャックとの書簡形式作品) を、そして今年になって *Vi* を上梓している。いずれも、10歳でボートピープルとして祖国ベトナムを離れ、命からがら家族とともにケベックに渡ったチュイ氏の半生が断片的に、ときには胸を刺すほどに生々しくも鮮やかに、ときにはユーモアを交えて織り込まれた秀作となっている。中国系の曾祖父を持ち、1968年に南ベトナムのサイゴンに生まれたチュイ氏は、北ベ



キム・チュイ氏 (左) と司会の関未玲会員

トナム軍の脅威が迫る1978年に祖国を離れ、一難民として辿り着いたケベックでゼロからの人生をスタートさせる。チュイ氏の作品には彼女たちを温かく迎え入れ、生きる糧を約束してくれた第二の故郷ケベックへの愛と、第二の母語となったフランス語への愛が満ち溢れている。本講演もまた、文面から滲み出る愛が、彼女の人柄そのものであったことを強く感じる講演となった。

「フランス語は私にとって愛の言語であり、自由を意味する言語です」と話すチュイ氏は、自らの言語体験と、ケベック州モンテレジーに位置する小さな町 (当時) グランビーに降り立った1978年3月27日の鮮明な記憶を語ってくれた。ベトナムを去り、難民生活を送ったマレーシアからケベックに渡ったチュイ氏家族と同胞を迎えたのは、真っ白な雪とグランビーの町中の人々の歓迎であった。使用できる水や食糧が限られ、熱帯特有の蚊を媒介とする病気で不衛生な身体のまま辿り着いた彼女を、「一瞬の躊躇さえなく」ケベックの人々が抱擁してくれたことに彼女は衝撃を受ける。アジア圏にはない「ハグ」の文化に戸惑ったのも事実であるが、近づくことも憚られるような決して清潔とは言えない彼女の身体を、丸ごと受け止めてくれたケベック人の温かさに、彼女はその瞬間「恋に落ちてしまった」と言う。「愛する人々の話す言語が、フランス語であったために、私はこの言語を習得したいと強く思ったのです」とチュイ氏は続けた。「祖国で監視下に置かれ

ているあいだ、私たちは話をすることもままなりません。皆、じっと黙って静かにしていました」。そのため、チュイ氏にとって母語であるはずのベトナム語は制約、忌避と不可分な言語となり、フランス語は心情を自由に吐露することのできる「解放」の言葉として意識されるようになる。「ベトナム語で書くことを勧めてくれる人もいますが、私はベトナム語では小説を書くことができないのです」と語るチュイ氏の言葉は、母語以外の言語で語る移民作家が抱える背景の重みを感じさせる、生きた証言そのものである。

チュイ氏は母語で小説を書くことができない理由として、次のように自らの言語体験を語ってくれた。第一に彼女の話すベトナム語は、10歳という幼少の時期までに経験した感情とともにしか会得されなかった言語であるために、心の機微を子細に表現できるようなメタレベルな段階には至っていないことが挙げられた。第二にベトナム語で「特に官能的な側面において」ものを書くとすれば、ベトナム人としての彼女の気質がそれを困難にさせてしまうと、チュイ氏は自己分析する。とはいえ小説を紡ぐ言語であるフランス語と、対極に位置するベトナム語の両者2つの言語が、彼女の人生の両極を担うことで、フランコフォン作家キム・チュイを下支えしていることは明らかである。ベトナムとケベック、ベトナム語とフランス語という2つの土地、そして2つの言葉のあいだで、その内奥を広げ

るように培われ、研ぎ澄まされた言語感覚こそが、チュイ氏の小説特有となる複合的な視点と、論理明快でありながらエモーショナルな美文を形づくることを可能としたことは間違いない。講演終了後の会場からは質問が絶えず、その1つ1つにチュイ氏が多くのエピソードを交えながら丁寧に返答していたのが印象に残る。1時間に及ぶ講演は彼女の愛の言語で満ち、瞬く間に過ぎてしまった。

\*\*\*\*\*

### シンポジウム「ケベック社会と女性」

司会：飯笹 佐代子（青山学院大学）

2013年秋、当時のケベック党政権が提案した、いわゆる「ケベック価値憲章」をめぐる大きな論争が起こったことは記憶に新しい。その際にライシテとともにケベック的価値として強調されたのが、「男女平等」という理念であった。ケベックの公的言説においてかねてより重視されてきた「男女平等」の理念は、住民の文化的背景が多様化するなかでいっそう意識されるようになった観がある。

では、伝統的な女性の生き様とはどのようなものだったのだろうか。また、「男女平等」に向けて、いかなる取り組みや実践がなされてきたのだろうか。こうした問題意識のもと、本シンポジウムでは、歴史、文学、政治、社会、言語、宗教等を含む多様な観点からケベック社会の女性たち、ないしはフェミニズムをめぐる動向に光を当て、考察を行った。

まず司会より、「静かな革命」以降の女性を取り巻く状況の変化について、特に、女性の解放というフェミニズムの言説とケベックの解放というナショナリズムの言説との結びつきや、それらの蜜月時代の終焉、といった歴史的、政治的な経緯を踏まえながら概観された。

小倉和子会員（立教大学）からは、アンヌ・エベールを振り返る——生誕 100 周年を機に」と題し、詩人、小説家、シナリオライターとして、女性の視点から 20 世紀ケベック社会に発信し続けた作家アンヌ・エベール（1916～2000）の作品に注目した考察が行われた。詩集『王たちの墓』（1953）や、『奔流』（1950）、『木の部屋』（1958）などの小説から、ペンと想像力によって、カトリックの伝統色の強い因習的な社会からのケベック女性、ひいてはケベック社会全体の解放を模索した作家の姿が示された。

矢内琴江会員（早稲田大学）からは、「女性たちの活動を支えるフェミニズムのネットワーク」と題する報告がなされた。最近の調査でも、ケベックの女性たちの状況は、教育分野を除くと依然として厳しいという。ここでは、女性たちの活動の展開にも貢献してきた「ケベック意識化グループ(CQC)」の実績に着目し、女性たちの主体的な活動を通して平等を実現していくための動きをいかにして組織的に支えていくことができるのか、という観点から分析の成果が示された。

矢頭典枝会員（神田外語大学）からは、



シンポジウムに登壇する矢頭典枝会員、矢内琴江会員、小倉和子会員、伊達聖伸会員（左から）と司会の飯笹佐代子会員（右）

「ケベック・フランス語の職業名と文体の女性形化」というタイトルのもと、社会言語学的観点からの報告がなされた。これまで、ケベック・フランス語における性差別をなくすために、言語の女性形化に取り組んできたケベック・フランス語局（OQLF）のガイドラインから、職業名の女性形化と文書の女性形化の双方に関する種々の事例をとりあげ、具体的な内容が紹介された。

最後に伊達聖伸会員（上智大学）より、「ヴェール論争とフェミニストの分裂——ケベック価値憲章をめぐる」と題して、2013年に提案された「ケベック価値憲章」をめぐる論争が、ケベックのフェミニズムにいかなる影響をもたらしたのかについて検討がなされた。また、同憲章に対して、賛成、反対、あるいはどちらでもないという、それぞれの立場の女性たちの言説を分析することを通じて、イスラームのヴェールや女性の身体をめぐる議論の論点が提示された。

以上の報告を踏まえて、会場から多くのコメントや質問が寄せられた。特にケベックとフランス、日本との比較の観点から活発な議論が展開され、基調講演者のキム・チュイ氏も積極的に議論に参加して下さった。女性をめぐる課題やフェミニズムをテーマとする本企画は、ケベック学会としては新たな試みであったが、この分野におけるケベック研究の意義と可能性を十分に示すことができたのではないかと思っている。この場を借りて、登壇者および関係者の方々のご協力に、あらためて謝意を表したい。

\*\*\*\*\*

#### <寄稿>

#### ブランサブロン紀行

大石 太郎 (関西学院大学)

ブランサブロン (Blanc-Sablon) は、ケベックシティから約 2000 キロ、セントローレンス川・湾の北岸を意味するコートノール地方 (Côte-Nord) の最北東端に位置する、人口 1000 強の小さな町である。Google Map で検索すると、州 138 号線が走っていることがわかる。138 号線といえば、モントリオールではダウンタウンを東西に貫くシャールブルック通りのことである。それがここまでつながっていると思えば感慨深いものがあるが、実は途中で途切れている。ブランサブロンはケベック州中心部から自動車のみでは到達できない町であり、138 号線が走るのはブランサブロンと隣町ボンヌエスペランス (人口約 700) のみである。



ボンヌエスペランスで途切れる 138 号線

それでは、この町に行くにはいったいどうすればよいのだろうか。自動車のみでは到達できないというのは不正確な表現で、やはり Google Map で経路検索をすると、コートノール地方の中心都市ベ・コモア (Baie Comeau) から州 389 号線を北上してラブラドル地方に入り、トランス・ラブラドル・ハイウェイを利用してブランサブロンに到達するルートが示される。しかし、このルートは夏であっても不慣れな旅行者にはおすすりできない。というのは、ルートの大部分が人の住んでいない地域であるうえに、道路もかなりの部分が未舗装なのである。もちろん一般の携帯電話は通じないので、このルートを利用して移動する人は宿泊施設などで緊急用電話の貸与を受けることがすすりられている。

結局、一般の旅行者が自動車のみでこの町にたどりつくのは無理で、フェリーを利用するのが一般的である。セントローレンス川下流地方 (Bas-Saint-Laurent) の中心都市リムースキとを結ぶフェリーが週 1 便運航されており、このフェリーはリムースキを月曜日の夜に出航してコートノール地方のいくつかのコミュニティやアンティコス



ティ島に寄港し、ブランサブロンには金曜日の朝に到着する。つまり、船内で4泊するわけである。あるいは、州中心部からの道路の終点であるケガスカ (Kegaska) に水曜日に寄港するので、そこまで自動車で行けば船内泊は2泊で済む。フェリーのルートはもうひとつあり、ベルアイル海峡の対岸ニューファンドランド島北端近くのセントバーブ (Saint Barbe) とを約2時間で結び、しかもこちらは毎日2便ないし3便運航されている。ニューファンドランド島西岸を延々と走らなければならないが、同島ノーザン半島北端にはヴァイキングの遺跡で知られるユネスコ世界遺産ランス・オ・メドーがあり、半島の付け根付近には同じく世界遺産グロスモルン国立公園がある。そこで筆者は、ベルアイル海峡を渡るフェリーでブランサブロンを訪れることに決めた。なお、飛行機という手はもちろんあるが、ニューファンドランド・ラブラドル州のローカル航空会社のみが就航しており、ケベック州中心部との往来には非常に不便である。

前置きが長くなってしまった。念願だったランス・オ・メドーの見学を前日に済ませた筆者は、2016年8月25日の昼前、セントバーブの港にいた。この航路はケベック州ブランサブロン行きのはずだが、港へつながる道路の分岐点にあるのは **Labrador Ferry** という標識である。実は、ニューファンドランド島とカナダ本土とを結ぶフェリーはすべてニューファンドランドの企業で

あり、この航路はニューファンドランド島とラブラドル地方とを結ぶためのものなのである。そこで、船内の時刻はニューファンドランド標準時で示される。ニューファンドランドは独自の時間帯を採用しており、ケベック州が採用する東部標準時より1時間30分進んでいる。ところがフェリーの時刻表はニューファンドランド標準時のみで示されており、ブランサブロンを出る船に乗るときには注意しなければならない。実際、ブランサブロンの宿の主人によれば、乗り遅れる旅行者もいるらしい。筆者は滞在中、時計をニューファンドランド標準時のままにして過ごした。なお、この地域は州中心部と同様に東部標準時を採用しているが、かなり東に位置するため、8月末でも日没は午後7時ごろであった。夏時間の時期が終わっても時間を元に戻さないのが、大西洋標準時で夏時間を採用していない、というほうが合理的かもしれない。

はるばるやってきたブランサブロンは、ものすごい霧に包まれていた。1950年代まで電気が通じていなかったこの地域は、ラブラドル司教に任じられたシェーファー神父の献身的な活動もあって生活の近代化が進んだという。現在でも州政府が統治に熱心なようにはみえないが、学校、病院、警察、信用組合などの施設は整備されており、生活の質は維持されている。ただ、新聞はなく、携帯電話も通じない。宿で利用できたケーブルテレビやインターネットはニューファンドランドのものだったようである。

Tim Hortons すらない土地で、まともな食事にありつけるだろうかとひそかに心配したのだが、幸いにも宿の近くに瀟洒なレストランがあった。Boréal などモントリオールでおなじみのビールこそなかったものの、レストランの店内だけはモントリオールと変わらない気がした。

霧が晴れた翌日は、道路のつながる最終地点まで車を走らせた。出入りの激しい海岸線で、入り江に発達した集落を結ぶ道路は尾根を越えるために急勾配のアップダウンの連続になり、坂の上から見下ろす風景が好きな筆者にはたまらないドライブとなった。途中、ホワイトリー (Whiteley) 博物館に立ち寄った。ホワイトリーとは、19世紀にこの地域に入植し、コッドトラップを発明してタラ漁に革命的発展をもたらした人物である。そして、漁業や水産加工工場で働く労働者がニューファンドランド島やラブラドル地方から集められた。実は、この地域の住民の大半は英語を日常的に用いるアングロフォンである。それこそが筆者がはるばる訪ねてきた動機であったが、ラブラドル地方の延長なのだと考えるとわかりやすい。いっそのことラブラドルに割譲してしまうのが合理的なようにも思えるが、カナダの州境画定は古証文の積み重ねによるものであり、容易に手をつけられる話ではない。

住民の大半がアングロフォンであるということは、風景からも垣間見える。州内でおなじみの標識がある一方で、フランス語



英語名のみのお店 (ボンヌエスペランス)

憲章が徹底されているようにもみえない。とはいえ、宿の主人も見学したホタテ養殖場の主人も英仏バイリンガルであり、養殖場の奥さんは、ここに1年いれば立派なバイリンガルになれるよ、と笑った。

僻遠の地ではあるが、地名から想像されるようにフランス人の探検の歴史という点でも興味深い地域である。また訪ねてみたいと思いつつ、帰りの船に乗り込んだ。

日本ケベック学会 (2016年11月現在)

●主要役員

立花英裕 (会長)  
伊達聖伸 (副会長)  
丹羽 卓 (副会長)  
矢頭典枝 (副会長)  
小倉和子 (顧問)  
C・ドゥロンジエ

(顧問、ケベック州  
政府在日事務所代表)

●広報委員

大石太郎  
丹羽 卓  
片山幹生  
杉原賢彦  
S・コルベイユ  
小松祐子

\*\*\*\*\*

AJEQ ニュースレター

年3回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎